

# 全科協 ニュース

URL <http://jcs.m.kahaku.go.jp>

全国科学博物館協議会 ☎110-8718 東京都台東区上野公園 独立行政法人国立科学博物館 Tel.5814-9863 Fax.5814-9898 平成17年11月1日発行（通巻第205号）

## 特集：博物館＝モノ集めの文化 学術会議が抱く博物館像

京都大学霊長類研究所 遠藤 秀紀

自然史博物館の新しい姿を求めて、日本学術会議から対外報告書を提示するのは、私にとっては二度目の経験となる。今期の「自然史系博物館における標本の収集・継承体制の高度化」([http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/data\\_19\\_2.html](http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/data_19_2.html))は、動物科学と植物科学の両研連、そして博物館小委員会の議論をまとめたものだ。デフレ経済と行政改革の政策セットのなかで、博物館と標本資料という文化の源泉を、どのような未来像をもって発展させていくべきかを、主たる論題に据えている。報告書の狙いは、いかに標本を集め未来へ継承するかという博物館の基本的責

務に絞られ、骨子は以下の三項目で、まさしく「標本」という論点に集約されている。

- (1) 国家的規模における自然史標本の収集体制と継承体制の確立
  - (2) 自然史系博物館の長期継承的な標本収蔵と研究体制の強化
  - (3) 大学・大学博物館等における自然史科学の拡充
- いずれも道険しい目標だが、(1)では、国家的政策として、自然史標本を後世に伝えていく理念と施策を確立すべきと訴えたものだ。国全体が文化としての学術を重んじ、その

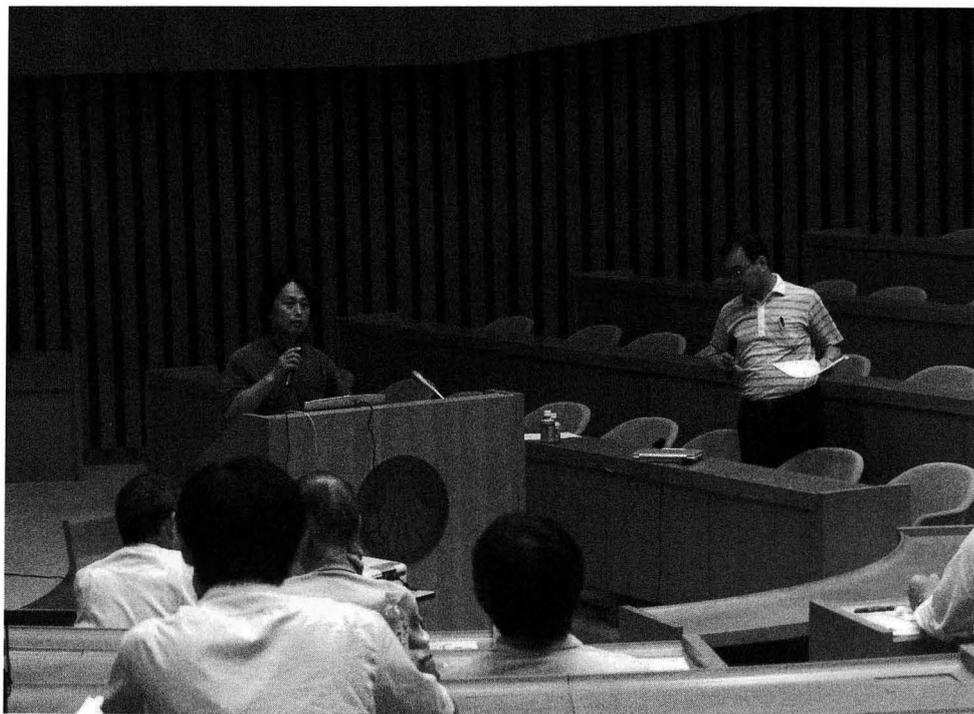


図1 シンポジウム「博物館＝モノ集めの文化」の一コマ。演壇に立つのは、神奈川県立生命の星・地球博物館の榎創氏。2005年9月3日、日本学術会議講堂にて。

中で国立科学博物館をはじめとする大型館が、標本を継承する長期的な責任を果たすべきという論旨だ。(2)では、近年議論を尽くすことなく、サービス業同然の評価システムのなかで自治体博物館が縮小されていくことを問題視し、新たな博物館拡大の道を、標本収集という側面から発案したものだ。(3)では、日本の大学や大学博物館において自然史学に向けられる努力が十分でないという認識のもとに、次なる策を求めている。すべての問題点について、日本の今日の経済政策が、学問や文化を軽視し、テクノロジーや現実的経済力のみを発展の対象にしてしまっていることを批判し、博物館界としての確たる価値観の構築を促し、その環境づくりに政府と社会が一致して取り組むように提案するものである。これらの目標は、2005年9月3日の学術会議主催・国立科学博物館共催の公開シンポジウム「博物館＝モノ集めの文化」においても、市民からの大きな発意の波として表出していた話題である。

一方、今期と前18期との対外報告書との組み合わせにより、博物館が築くべき未来像はより明瞭となろう。18期のレポート「自然史系・生物系博物館における教育・研究の高度化について」においては、

- (1) 学芸員制度の整備・学芸員資格の高度化
- (2) 博物館に対する文部科学省科学研究費補助金申請資格付与の拡充
- (3) 博物館職員再教育制度の確立

が取り上げられている。全般に博物館で働く「人」を対象とした議論だ。

現在までに(2)の項目の成果は大きなものがある。文部科学省の努力の下に、自治体の自然史博物館の科研費指定機関化が進み、奨励研究の一件あたりの研究経費の大幅増額などが行われ、博物館職員の研究への公的支援は確実に拡大している。(1)や(3)は制度面の革新を求めているため、一朝一夕に成果を上げていくものではないが、いずれ実を結ぶものと期待されている。

二期にわたって中心になって携わっていた私から見て、実際に大きく変わったのは、こういう学界からのアクションに対する行政官からの政策的呼应や、一般市民からの心情的支援が、明らかに大きくなったことだといえる。18期の議論を開始した当時、行政や経営から博物館を支えている人々のかなりの部分に、学界やアカデミズム、あるいは学術会議そのものに対して、それを「学者の机上の空論」

であるとか「教授の優雅な理想論」であるとして故意に遠ざけ、議論の中身から目を背けようとする風潮が見受けられた。各自治体の行政官には、中央政府の学術政策と自治体の博物館事情の乖離が足枷となって、議論に参加する意欲を削がれている人々が多かった。学術会議から、「博物館についての勉強会を開こう」と声をかけても二の足を踏む者が珍しくなかったのである。日本博物館協会のスタッフからは「学者は反行政的意見しか唱えないので、意味がない」という参加を拒む返答を受け取って、学術会議の行政官や研連委員とともに、頭を抱えたものである。全科協は前向きな人々の意志がつねに感じられるものの、「学者と行政が議論をしても現実はず変わらず、今日の収穫にはつながらない」という無力感を漂わせていたことと思う。

それが今日、破綻を来した財政と、それを盾にした社会教育の粗悪な“合理化”を見て、もはや訴えの主が学者であるか行政であるか、財界人であるか一市民であるか、などを、人々も博物館も問うことはなくなった。必要な意見は、どのような属性の人間のものであっても欠かさず博物館の未来に活かすという点で、過去を墨守するごく一部の人間を除けば、危機感の認識に一致を見たということだろう。

そして、その力が集中する一点に、モノを集めるという博物館の特性が表現されていくといえる。これまでのように、行政官がモノ集めを理解せずに、博物館独自の学術的責任に無関心であるということはある得ない。同時に、研究に携わる人々も、自ら編み出していく科学的知をもって、博物館と社会との関係をどのようにリードしていくべきかという未来像の構築を問われている。いまほど、自然



図2 国立科学博物館の液浸収蔵庫。モノを集めるという地道な仕事が博物館を築き、真の文化を創る。

史博物館がその将来像として自然物を集め、未来の知のために引き継ぐという理念の強化と、施策の実行を求められている時代はないだろう。人の生活に役に立つかどうか、国の経済力や安全保障を支えるかどうかという即物的価値観を克服し、教育と学問を通じて、現物標本の収集に基づいた文化の継承という責任を担えるのは、博物館だけといってよい。

不幸にしてサッチャー型行革の帰結として、公的機関がどこも“評価疲れ”を来たし、人類・社会にとって魅力的

な自らの未来像を示すことができなくなっている。博物館も例外ではなく、画一的な物差しによる評価を受身で待つように強いられるは、行革以前に本質的アイデンティティが崩壊してしまう。博物館は、人間の叡智の根源を蓄積し、それを標本として引き継ぐことの全人類の意義を、哲学と活動をもって示し、愚かな淘汰の時代にも負けずに発展を図らなくてはならない。それが実現していく世の中を、学術会議は創りたいと考えているのである。

## 未来を育てる標本

中央大学理工学部 西田 治文

日本の自然史科学の現実を語る例として、まず悲しい事実から書き起こさなければならない。

今春、国際古植物学会会長でもあるイギリスの古植物学者から、日本のある国立大学に収蔵されているはずの植物化石のタイプ標本借り出しについて、問い合わせがあった。最新の機器を用いて、再検討したいとのことである。件の化石種を記載された教授はすでに退官され、古植物専門の後任も残念ながら採用されなかった。日本における標本取り扱いの現実を“熟知”していたので、不安と共に大学に問い合わせたところ、標本はみつからなかった。学問の世界では最も恥ずべきことのひとつである、証拠の紛失が起きたのである。現在の施設関係者を軽々に批判することは、できない。標本の調査には充分尽力していただいた。問題は、根底にある日本の「モノ集め」に対する思想的貧困と、その貧困な思想に基づいて延々と継承されてきた、貧困な標本管理体制である。

科学技術立国を標榜することは、日本の経済を支える上で、重要である。経済が崩壊すれば、満足な教育は望めない。教育が成り立たなければ、国家を支える人材は育たない。では、教育には何が必要か。重要であるのは、知識と人間性豊かな大人をまず増やすことである。教育者は学校だけにいるものではない。親と社会全体の資質が、次世代を教育するのである。では、ここでいう教育者に何を求めるのだろうか。ひとつは、好奇心と平衡感覚を育てる心だと考えている。自然界や社会における多様な存在や現象に

目を向ける姿勢、複雑な現象の中で何を問題とし、どのように最善の解決を模索するのかを決定できる能力は、科学から家庭まで広く人間社会において重要な役割を果たしていると思われる。このような能力は、成人してから知識として身につけるものではなく、初中教育以前を含めた早期に、体験として身につけることが望ましい。そのための教育手段のひとつとして、自然史科学が貢献できるといえる。このあたりの深い議論については、遠藤秀紀氏による本特集の記事やその引用を参照されたい。

自然史科学は、他の科学と同様に、研究成果の証拠を提示し、その検証を可能にしておかなければならない。標本の存在意義のひとつは、まずここにある。また一方で、いわゆる森羅万象に対し、さまざまな興味と科学的成果を生む可能性のある事実の集積として、「何の役に立つかわからない」標本にも収集価値がある。だからといって、何でも闇雲に集めようという姿勢は、少なくともまともな研究者にはないはずである。

所蔵標本から、新たな発見がなされることは、社会科学も含めて、科学においてはごく当たり前の現象である。私自身の例をご紹介しよう。専門は古植物学なので、石集めは研究の出発点である。1993年に文部科学省の科学研究費による海外学術調査によって、約200kgの石をオーストラリアで採集した。2.5億年前の Gondwana 大陸にあった、ある湿原の泥炭が、そこに生えていた植物ごと化石化したものである(図1)。目的は、この時代の植物の生殖

器官であり、それが含まれていることは確認済みだが、中から何がどう見つかるか予測はできない。その岩石から、2.5億年前の遊泳精子を発見し、発表するのに10年かかった（Nature 422；396-397）。自然史科学の研究では、このように漠然とした予測から標本を収集し、時間をかけて成果を出すという過程がごく普通に存在する。そして、少なくとも科学的に記述された標本は、未来永劫にわたり保存されなければならない。

このような発見の過程を、素直な知的喜びとして受け取ることができる能力は、好奇心が旺盛な子供時代が最も高いと思われる。自然史科学のみならず、様々な知的喜びを体験できる場として、博物館の果たす役割は大きく、その機能を支える重要な要素のひとつが標本でもある。あるアメリカ製のB級恐怖映画においてさえ、市長主催の博物館見学パーティーがその舞台となっていた。社交の場として大人が博物館を楽しもうとするような文化的下地が、実は標本をいかに大切に感ずるかという、我が国に永く欠落してきたものを育てているのだと痛感する。標本が伝える科学の世界は、いわゆる科学技術を支える因果律で説明される世界とは異なる側面がある。このような科学を、slow scienceと表現する場合もあるが、なんとなく時代遅れ感が漂うので、私はsoft scienceと呼びたい。科学全体への

入り口として、soft scienceが提供できるのは、限りない未知の世界であり、標本は未知を知るための未来への証拠でもある。

日本の（人文社会科学を含めた）標本管理体制を確立するためには、まず基幹施設である博物館の存在が保証されねばならない。特に、多くの地域博物館の存在は重要である。しかし、現状は憂慮すべきものがある。日本の博物館の多くが、入場者の多寡で評価されつつあるという点である。特に、地域博物館ではこの傾向が強いようだ。そのような評価基準が先行するのは、日本がまだ博物館を重要な教育拠点として認めていないからである。残念なことに、博物館の研究者にも、館を研究拠点としか考えないような言動が散見できる。研究者のいない博物館は、良い教育はできないという信念を私は持っているが、教育に力を注ぐことは博物館の責務であることをまず理解すべきである。現在のように、学校教育においても地域ごとの柔軟性が要求される時代にあっては、地域の教育には地域が責任をもち、その緻密な教育が日本や世界を支えると言い切るほどの気概を示すべきである。地域の博物館は、そのための欠くべからざる教育機関として明確に位置づけできる。学校が生徒数だけで評価できるはずがないのと同様に、教育機関である博物館であればまずその存在を前提にして、如何に



図1 オーストラリア、クィーンズランド産のペルム紀硅化泥炭。植物の枝などが見えるが、一般の目にはただの石である。しかし、2.5億年前の生が詰まっている。

社会と科学に貢献できるかを判断基準とすべきであろう。

本来は、標本の重要性が充分認識されていれば、管理施設の存在意義は足りるはずである。学術会議古生物学研連では、2001年から日本古生物学会と協力して「二十世紀に記載された日本産化石の模式標本のデータベース」を刊行した。刊行には、標本の所在を公式に認定することで、保管機関の存在と存続の重要性を社会に訴えるという意図もあった。標本の管理には、箱だけではなく管理者が必要である。日本では、標本管理の専門職がほとんど皆無という実態も指摘しておかなければならない。大英博物館がサッチャー型「改革」を行ったとき、古植物部門で職を失ったのは、研究者であって標本管理者は最低数だが人数が残された。このことは、標本を通して未来を指向し続けようとする、欧米文化の奥深さを象徴している気がする。

ニュージーランドは、欧米型の文化が侵入してから、まだ日の浅い国である（1642年タスマンが発見、入植はその

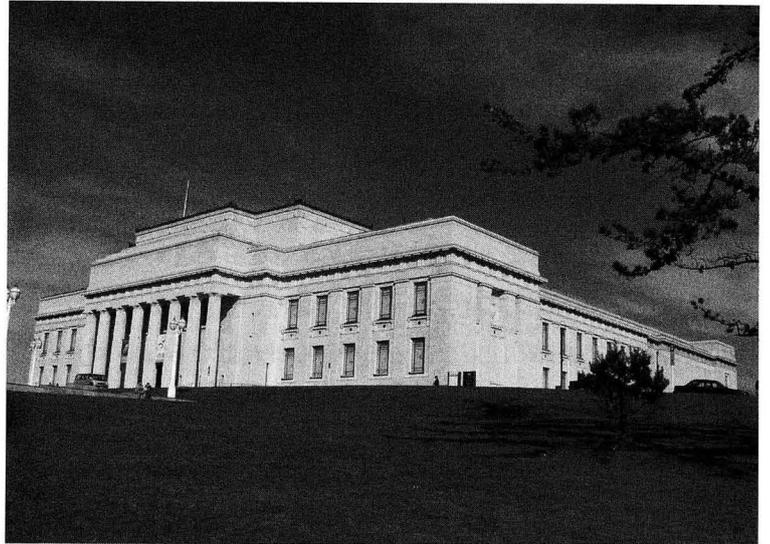


図2 ニュージーランドのオークランド博物館。中には絶滅した巨大走鳥類、モアの全身骨格もある。

約100年後)。北島のオークランドには1852年設立のオークランド博物館がある（図2）。入植後わずか100年で設立された同館は、人文、自然を含めた“雑多な”収蔵品が展示され、日本の零戦までである。そこに、新たな文化を創造しようとする南半球の島国の強い意志を感ずるのである。

## 資料と研究活動を守る博物館現場の戦術 —身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ—

千葉県立中央博物館 森田 利仁

日本の大学で動植物標本などの自然史資料が散逸していると指摘されてすでに久しい（鎮西、2005）。また日本の博物館が、資料や研究活動を軽視する傾向があると指摘されてからも久しく長い時間が経過している。自然史学会連合や分類学会連合の設立に象徴されるように、動植物の分類学、古生物学、地質学、野外生態学などの自然史系の学協会あるいは個別の研究者からは、これらの問題を改善するため、多くの提言がなされてきた。にもかかわらず、今日に至ってもなおこれらの問題は、改善の糸口さえ見えない。今年、学術会議の動物科学・植物科学研連が提出した報告書（以下、学術会議報告書）は、そのことを厳しく指摘している。さらに今日、独法化、指定管理者制度、民営化、そして統廃合など、全国の博物館に吹き荒れている再編の

嵐が、この問題にさらに深刻な追い討ちをかけている。社会の多様なニーズに応えるため、博物館はサービスというアウトプットに組織のエネルギーの大半を注がねばならず、資料や研究というインプットへのエネルギーは削がれてしまっている。このような状況下、博物館の現場で働く研究者の切実な声はどこまで社会に届き、博物館の経営に影響を与えることができるのだろうか。

### 災い転じて福となす

たしかに今日、博物館活動、とくに資料や調査研究にかかわる活動に対する風当たりは厳しい。しかし見方を変えれば、今日ほど、博物館の経営が市民や行政から注目を浴びている時代はなかったともいえる。利用者の視点からで

はなく、納税者として、経営者の視点で博物館問題を考える人たちが確実に増えてきている。たとえば千葉県では、NPO法人による県立博物館の評価活動が数年前から行われている。言い換えれば、学術会議報告書のようなものも、かつては一部の専門家以外には読まれなかったが、今日では広く一般市民にも読まれる可能性が高くなったといえる。ただしこのことは同時に、提言する側も、この新しい時代に合わせて提言の仕方を変えてゆかなければならないことを意味している。

### 今、説得力のある提言とは

自然史系の研究者にとって、理想の博物館像は常に欧米にあった。なぜなら、欧米の博物館では、資料管理や調査研究の意義がよく理解され、資料管理者や研究員の地位が日本とは比べようもなく高いと信じられていたからである。そして実際そうであろうと思う。そして今日では、このことの制度的なからくりも広く理解されている。すなわち、政府からの助成金に依存する博物館の経営体質、資料管理体制を重要な審査基準とする欧米の博物館助成制度で

ある。もちろんその助成制度の背後には、博物館資料を国の大切な財産と考え長期的に拡充しようという、明確な国家意思の存在が見える。学術会議報告書が指摘するように、日本にはそのような意志がまだ見えない。博物館資料とその研究活動に関する問題は、目先の短期的な成果を論ずるテーブルではなく、100年先の学術、教育、国民の精神風土、あるいは国家の対外的な競争力などを議論するテーブルにこそ、乗せるにふさわしいテーマなのであろう。このような議論のテーブルを作ること、そして博物館法改正を含む欧米に似た制度上の改革を行うことが、欧米に近づくための当面の目標となるべきだろう。その点で、今回の学術会議報告書は明快であり、これからの日本の自然史学にとって灯台のような役割を担うであろう。

しかし他方で、地方公立博物館で働く研究者の立場から見ると、この目標はそのままズドンと提言したとしても、受け入れられるような代物ではないとも感じるのである。現在の役所の中では、おそらく無視されるだろうと思う。これはかつて我々研究者が偏見から思い込んでいたように、博物館の資料や研究活動について役人が無知なため



大移動前の動物系収蔵庫

は決してない。明らかにゆとりがないのである。もっと深刻で差し迫った問題に直面しているからである。たとえば千葉県では、毎日の開館に困らない程度の職員定数だけは死守しようと、博物館を担当する文化財課も必死に努力しているのである。資料の大切さ、研究の大切さは、十分過ぎるほど理解しているのは間違いないが、そんなことまで考えている余裕が今はないのである。彼らにとって、学会会議報告書などは、要求ばかりが盛り込まれた学者の身勝手な主張としか感じないだろう。もちろんバブル期までは、そんな陳情型の提言でも相手にするゆとりはあったかもしれないが、現在、行政が真剣に取り上げるのは、市民の大多数が支持する提案か、コストや財源にまで踏み込んだ具体的な政策提言のどちらかである。どちらでもなければ、無視されるだけだろう。

### コスト意識、研究者の責任

財源についてはともかく、真剣に施策に反映させようとするならば、計画を実施する場合に必要なコストについては、提言する側が責任をもって説明する必要があるだろう。どんな事業にもコストはかかる。提言する際には、無駄を徹底的に削りこんだ、最低限の要求であることを印象づけることが大切である。「なんでもかんでもよくしてくれ」というどんぶり勘定の要求ではないことを印象づけることが肝心である。しかし、我慢するところは我慢する、お互いに譲り合う、ということをもっとも苦手になっているのが、研究者という人種である。自然史という個人商店の集まりのような寄り合い所帯においても、「ある分野は当面我慢してくれ」などということは簡単に言えるものではない。結局いつも、外に向かっては高邁な提言を展開しつつも、内部ではあげつない足の引っ張り合いを演じる、という恥ずかしい構造になってしまうのである。小さな空間に、研究者と行政マンがひしめき合っている地方博物館では、その恥ずかしい構造は、市民や行政に対して隠しようもない。高邁な提言や高尚な議論の衣の中の恥ずかしい裸体が、透けてみえてしまっているのである。逆に、いわゆるうまい経営をやっているとされる博物館は、内部の対立をうまく調停し、外に向かってはあくまで、一致団結した姿勢を見せることに長けた博物館であるといえる。

ひとつのエピソードを紹介したい。中央博物館ではかつて、収蔵庫にかかわる大問題が存在した。収蔵資料の性質

と収蔵庫環境の不適合、資料点数の増加率と収蔵空間の広さが比例しないなど、収蔵資料を収蔵庫間で大移動しなければ解決できない問題が発生していたのである。資料に関する開館時の予測と、開館後の実際が大きく乖離したために発生した問題であった。しかし資料をどこにどう移動するかについて、専門分野間の意見調整ができず、何年間もこの問題は放置されつづけてきた。その間、予算を管理する庶務課の反応も鈍かった。しかし平成14年、数人の献身的な研究員による調整作業により、ようやく低コストによる移動案が完成し、事が一気に成ったのである。その案が提示されたことにより、庶務課も協力的になったことが成功の最大の要因であった。おそらく、庶務課の行政マンには、移動案の詳細な内容よりも、多くのわがままな研究者の利害を見事調停した、この数人の研究者の努力と誠実さにむしろ心を動かされたのではないかと推察している。

自然史科学も、そして自然史系の博物館もともに、経営上の崖っぷちに追い込まれ、徳俵でこらえているのが今日の日本の現状である。ここで我々現場で働く研究者がなすべきことは、まさに「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」ではないだろうか。小異を捨て、大同につこうではないですか。

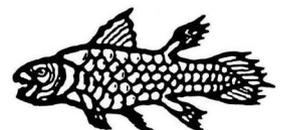
### 参考文献

- 鎮西清高、2004 大学博物館について、化石76号、p.134-137.
- 布谷知夫、2005 博物館の理念と運営—利用者主体の博物館学、雄山閣、234pp.
- 日本学術会議動物学研究連絡委員会・植物科学研究連絡委員会、2005、自然史系博物館における標本の収集・継承体制の高度化。委員会報告書。

美術

はく製

〈各種生物〉  
剝製・骨格標本・レプリカ  
加工/販売/リース



有限会社 東洋近代美術研究所

製作所 〒272-0816 千葉県市川市本北方2-18-1 ☎047-337-5678  
FAX 047-338-1978

本社 〒272-0834 千葉県市川市国分5-3-25 ☎047-374-1564

E-mail: toyobken@taupe.plala.or.jp

### 米ポートランドの森林博物館が新装オープン

オレゴン州ポートランドのワシントン公園にある森林博物館が、30年ぶりに総工費7500万ドルをかけて全面的に改装されて、2005年6月30日にオープンした。非営利法人の世界森林センターによって運営されている同館の新しい常設展示では、世界の森林の生物多様性について学べるだけでなく、植林を含む森林のマネジメント、林業の仕事についても学ぶことができる。またふだんあまり知ることができない、森林の地下の様子が目玉展示として紹介されている。Discovery Museum, World Forestry Center.

<http://www.worldforestry.org>

### 米ボストン市のビジネス街のド真中に植物園を整備へ

世界各地の大都市のビジネス街には大なり小なりの公園が設けられており、そこでは近くの役所や企業で働く人々が、昼休みに弁当を食べたり、簡単な体操をしたり、散策したり、日光浴をしたり、また昼寝をしたり(さぼったり)の格好の場になっている。人によっては、あるいは一人になって、公園内の樹木や花に語りかけて、日常の仕事からくるストレスを癒す場として使われている。上野公園や日比谷公園ではまさにこういった光景を見ることができる。都市の中心部に、それもビジネス街に公園が設けられていることは多いものの、植物園となると皆無に近い。もちろん小石川植物園も国立科学博物館の自然教育園も都心にあるが、まわりはストレスが渦巻く茅場町や丸の内のようなビジネス街ではない。

現在ボストンのビジネス街の真中に、植物園を整備する計画が進んでいる。場所は、1日に6万人の乗客が利用するボストン南駅の正面入口の近くにあり、またボストンのビジネス街に隣接し、そして年間2000万人の観光客が訪れる南京街と近くのニューイングランド水族館も数分の徒歩距離にある。

植物園の正式名称は「The Botanical Garden and Conservation Learning Center」だが、整備計画そのものは公式的にダーウィン・プロジェクトと呼ばれている。

主要テーマは生物多様性になっている。そのため、ふつうの植物園とちがって、ただ単に樹木や花が見られるだけでなく、それらとともに切っても切れない相互依存関係にある動物も紹介されることになっている。

建設地の規模は4エーカーで、主要な建物はボストンの長い冬の期間に対応すべく温室が中心になっている。また栽培展示場だけでなく環境保存の教育施設(Conservation Learning Center)も併設されることになっている。

近年、高齢化社会が進む先進国の間では、高齢者を対象に園芸療法への関心が高まってきているが、それと並行して、高齢者のみならず広い年齢層の人々を対象に、樹木や花がもつ「痛んだ心を癒す」効果も注目されており、新しく整備されるボストンの植物園も、痛んだ心を持つ多くの都市生活者のために、こうした「植物の癒し効果」に力を入れていくようだ。完成時期：2009年予定

The Botanical Garden & Conservation Learning Center. Darwin Project.

<http://www.darwinboston.org/>

### 米カリフォルニア科学館にエコロジーの常設展が2008年にオープン

ロサンゼルスのカリフォルニア科学館では、約15,800m<sup>2</sup>の規模の施設拡張工事が2005年に着工し、2008年に完成する予定だ。その中に、エコロジーをテーマとした展示「World of Ecology」が新設される。ここでは175点のハンズオン型の体験展示が設けられ、世界各地の特徴ある生態圏に触れることができる。計画されている常設展示では、熱帯雨林から移植した樹木の森が再現され、樹上を歩ける空中回廊を始め、海底のジャイアントケルプの森の散策、動物の生きた生態展示等が計画されている。

World of Ecology. California Science Center.

<http://www.californiasciencecenter.org/>

### 米ノートバート自然博物館で、気候に関する常設展が2005年9月24日にオープン

気候はたいていの英和辞典では、climateとweatherが訳語として用意されているが、英語圏において、これら二つの単語には厳密な意味の違いがあるようだ。いまここでそれを説明することを控えたいが、その答えはシカゴのノートバート自然博物館(シカゴ科学アカデミー)で9月24日にオープンする常設展「Climate Chaos」で得られる。同展では、過去・現在・未来において、地球的規模の気候がどのように生命に影響を与えるかを明らかにしてくれる。また地球がどのようにして形成され、そして炭酸ガス

をはじめとするさまざまなガスがどのように生命を形成してきたかも明らかにしてくれる。

Climate Chaos. The Notebaert Nature Museum.  
<http://www.naturemuseum.org/>

#### 米シカゴ植物園で、日本の絶滅危惧種の植物画展が開催

日本の希少・絶滅危惧種に指定されている植物のうち、70種が植物画（ボタニカル・アート）として、シカゴ植物園で2005年8月19日から10月2日まで開催された。同展は、日本のアマチュアとプロの植物画アーティストが会員になっている日本植物画倶楽部によって主催され、国立樹木園（ワシントンDC）とシカゴ植物園が後援した。

Endangered Plants of Japan.

日本植物画倶楽部

Chicago Botanic Garden.

<http://www.chicagobotanic.org/art/index.html>

<http://www.art-hana.jp/>

#### 米シカゴ植物園で、造園家ダン・キーレーの作品展が開催

ダン・キーレーは現代アメリカを代表する造園家であり、彼が設計した庭園（ガーデン）は米国各地の公園、私邸や植物園で見ることができる。シカゴ植物園もそのひとつである。2005年6月24日から8月7日までシカゴ植物園で開催されたダン・キーレー展は、キーレーの作品を写真と模型で紹介したものだ。

Dan Kiley: Master Landscape Architect and Modern Garden Design.

Chicago Botanic Garden.

<http://www.chicagobotanic.org/art/index.html>

#### 米ブルックリン植物園で、パステル画の植物画展が開催中

植物画（ボタニカル・アート）は、たいてい水彩絵の具で描かれたものが多いが、パステル画のものも多く、それをと得意とする画家もいる。ナンシー・ストロウ（Nancy Storrow）もそうした画家の一人だが、花を題材にした彼女のパステル画の作品が現在ニューヨークのブルックリン植物園で開催されている。2005年9月24日から11月13日まで。会場：スタインハート・ギャラリー。

Second Nature: Abstractions of Botanical Forms.

<http://www.bbg.org/>

#### 米ニューヨーク植物園で、ルドゥーテの植物画展が開催中

18世紀のベルギー生まれのフランス人画家ピエール＝ジョゼフ・ルドゥーテは、「花の画家」として知られ、バラ

の植物画を多く描いた宮廷画家であった。代表作『バラ図譜』は2003年秋にBunkamuraザ・ミュージアムで本邦初公開され、多くの植物画の愛好家を魅了した。

ニューヨーク植物園で開催中のルドゥーテ展では、『バラ図譜』の原画をはじめ、『ユリ科植物図譜』やルドゥーテが残した手記なども紹介されている。2005年10月22日から2006年1月22日まで。

Flowers by Redoute, Artist for an Empire.

The New York Botanical Garden.

<http://www.nybg.org/>

#### 英王立キュー植物園で、同館収蔵の古文書を公開

ロンドンの王立キュー植物園は1759年に創設された歴史的な植物園であるが、長くイギリスの王族や貴族だけに公開が限定されていた時期が続いた。しかしイギリスの帝国主義の貪欲的な拡張と並行して、1841年から1900年にかけての時期は、この植物園がこれらの特権階級の趣味的な庭園から本格的な、しかも世界的な研究型の植物園へと生まれ変わっていった転換期であった。

このほど、この期間に収集された植物学者による植物画や手記等、また造園家の庭園設計図が同園の附属図書館で、2005年10月から11月にかけて一般に公開された。1849年に当時の館長だったジョセフ・D・フッカーがヒマラヤ探検をした際に描いたチョモランマ（エベレスト）のスケッチも初めて公開された。

New beginnings at Kew: The rebirth of a Garden: 1841-1900.

Royal Botanic Gardens, Kew.

<http://www.rbgekew.org.uk/events/archivesawareness.html>

#### 英王立キュー植物園で、チフーリのガラス作品展が開催中

デーラ・チフーリは米国が誇るガラス工芸家であり、彼の作品は日本でも愛好家が多い。彼の花をモチーフにしたガラス作品展がはじめてロンドンの王立キュー植物園で開催中である。25点の作品は、故ダイアナ妃記念温室をはじめ、園内の各温室や池の中でも見ることができる。

Gardens of Glass: Dale Chihuly.

Royal Botanic Gardens, Kew.

<http://www.rbgekew.org.uk/chihuly/exhibition/>

\*（やすい・りょう）

E-post: ZAKvaran@aurora.ocn.ne.jp

# 11月12月の特別展

開催館	展覧会名	開催期間
岩手県立博物館	企画展「縄文北緯40°～前・中期の北東北～」	10月9日～11月27日
	テーマ展「新収蔵資料展」	12月10日～1月15日
久慈琥珀博物館	秋季特別企画展「久慈地方の琥珀産業史」	10月1日～11月13日
陸前高田市立博物館	秋の特別展「おもちゃ展」	11月1日～1月29日
秋田県立博物館	企画展「石・火山・ひと～秋田の大地とくらし～」	9月17日～11月27日
秋田大学工学資源学部附属鉱業博物館	企画展「環境と調和したクリーンテクノロジー」	10月1日～11月23日
ふくしま森の科学体験センター	特別展「科学遊園」	12月14日～3月31日
栃木県立博物館	企画展「祈りのすがた～下野の仏画～」	10月1日～11月13日
	テーマ展「土のひみつ」	7月16日～3月31日
群馬県立自然史博物館	企画展「ニッポン・ヴンダーカマー 荒俣弘の驚異宝物館」	10月1日～11月27日
狭山市立博物館	秋期企画展「池原昭治 童絵（どうえ）の世界展」	10月8日～12月18日
所沢航空発祥記念館	秋の特別展「60・70年代の空の旅～国際線航路へタイムスリップ！～」	10月8日～12月4日
埼玉県立自然史博物館	特別展「石の用と美」	10月8日～12月4日
東金子ども科学館	巡回展「ノーベル賞を受賞した日本人の科学者」	11月1日～12月25日
通信総合博物館	第31回「私のアイデア貯金箱」コンクール入賞作品展示会	11月2日～11月6日
	～H.C.アンデルセン生誕200年記念～デンマークから愛のメッセージ 手紙とゆかりの品々でつづる「アンデルセンの生涯とその作品展」	11月19日～12月25日
国立科学博物館	特別展「パール展～その輝きのすべて～」	10月8日～1月22日
機械産業記念館（TEPIA）	第18回展示「最先端技術展～日本の未来をひらく～」PART I	9月9日～12月16日
消防博物館	所蔵品公開展示「町火消の誕生と大岡越前展」	11月3日～12月4日
板橋区立教育科学館	巡回展「毛利宇宙飛行士の部屋」	12月3日～2月26日
たばこと塩の博物館	企画展「とんこつたばこ入れ～固い素材の柔らかい造形～」	9月10日～11月6日
	企画展「梨本宮家と渋谷～ある皇族妃の見た明治・大正・昭和～」	11月19日～1月15日
多摩六都科学館	「ボタニカルアート展」	12月9日～1月15日
馬の博物館	秋季特別展「馬（め）いど・いん・じゃぱん～日本美術の馬～」	10月1日～11月27日
横浜子ども科学館	企画展「理科だいすき！～島津・理科教育130年のフロンティア～」	9月17日～11月6日
	企画展「魔法のつみ木 カブラ」	11月19日～1月15日
横須賀市自然・人文博物館	特別展示「三浦半島にすむ昆虫からのメッセージ～身近な自然 今昔～」	8月25日～11月25日
神奈川県立生命の星・地球博物館	企画展「丹沢～むかし・今・あした～」	12月10日～2月12日
富山市科学文化センター	企画展示「なんで？科学のクイズ展」	11月3日～12月14日
立山カルデラ砂防博物館	第16回企画展「常願寺川砂防100周年 護天涯への想い」	10月8日～11月27日
福井市自然史博物館	第60回特別展「越前おろしそばの自然史」	8月6日～11月20日
佐久市子ども未来館	秋のミニ企画展「科学探検隊-② 光であそぼう！」	10月1日～11月27日
	企画展「オーロラってなあに？ オーロラの不思議・オーロラの魅力」	11月3日～11月27日
	ミニ企画展「クイズと実験でチャレンジ・ザ・物理」	12月23日～1月9日
飯田市美術博物館	特別展「中世信濃の名僧」～知られざる禅僧たちの営みと造形	10月15日～11月23日

開 催 館	展 覧 会 名	開 催 期 間
岐阜県博物館	秋季特別展「名水・温泉・名勝」展～水と大地のハーモニー～	9月17日～11月13日
中津川市鉱物博物館	第9回企画展「ようこそ！ガラスの国へーガラスの話ー」	7月31日～11月20日
	第19回私の展示室「鉱物は語る大地の記憶ー中部地方の鉱物ー」	12月11日～3月5日
ディスカバリーパーク焼津	特別展「ロンドンからくり人形展」	10月8日～12月4日
浜松科学館	特別企画「昆虫の絵コンクール作品展」	11月18日～11月24日
名古屋市科学館	「なるほど・THE・エネルギー 科学市場」	11月3日～11月16日
豊橋市自然史博物館	収蔵資料紹介展「地下世界の地図ー地質図」	10月15日～12月11日
トヨタ博物館	企画展「クルマとモード～ベル・エポックからモダニズムへ」	10月6日～12月11日
鳥羽水族館	50周年特別パネル展「鳥羽水族館の50年」	5月15日～12月31日
滋賀県立琵琶湖博物館	企画展示「歩く宝石オサムシ～飛ばない昆虫のふしぎ発見～」	7月16日～11月27日
	ギャラリー展示「タガベユのため池探検」	12月23日～2月26日
大阪市立自然史博物館	特別展「恐竜博2005ー恐竜から鳥への進化ー」	10月8日～11月27日
さしわだ自然資料館	特別展「太古の海の生きものたち～化石の水族館～」	10月18日～12月18日
兵庫県立人と自然の博物館	企画展「見逃すな！はてなの世界」	10月22日～1月22日
明石市立天文科学館	特別展「ニュートリノ展」	11月9日～12月11日
	特別展「全国カレンダー展」	12月17日～1月29日
出雲科学館	特別展「深海ドリリング計画展」	11月12日～11月27日
	特別展「島根の希少動物展」	12月3日～12月18日
広島市こども文化科学館	「小学生環境・ゴミ・エネルギー問題絵画コンクール入賞作品展」	11月23日～11月27日
防府市青少年科学館	企画展「電気と光のおもしろ実験工房」	10月22日～11月27日
萩博物館	企画展「発掘された城下町～出土品が語る江戸時代の萩～」	10月29日～1月22日
あすたむらんど徳島 子ども科学館	巡回展「なんで？科学のクイズ展」	12月23日～2月14日
愛媛県立博物館	特別展「愛媛県児童生徒理科研究作品展」	10月29日～11月6日
	テーマ展「水田の生きもの」	10月1日～11月27日
	テーマ展「カニのくらし」	12月1日～1月29日
佐賀県立宇宙科学館	秋の企画展 生活を変えた科学技術展～さぐってみよう！「便利」のしくみ～	10月15日～11月27日
宮崎県総合博物館	特別展「THE 地震展」～宮崎大地震に備える～	8月13日～11月6日

## 展示更新

三菱みなとみらい技術館（神奈川県）

[展示室名] 海洋ゾーン

[主なコーナー]

地球深部探査船「ちきゅう」

深海巡航探査機「うらしま」のコーナーが

新たに設置

[更新の展示面積] 248m<sup>2</sup>

[オープンの期日] 平成17年9月10日



深海巡航  
探査機

「人が集う空間」という意味を、ノムラはいつもトータルで考えています。

集まる理由を、ノムラは知っています。

集客環境づくりの調査・コンサルティング、企画・デザイン、設計・制作施工ならびに各種施設・イベントの活性化、運営管理

**NOMURA** <http://www.nomurakougei.co.jp>  
株式会社 乃村工藝社 本社:東京都港区芝浦4-6-4 電話03-3455-1171(代)

省スペース展示に最適な、小型ドームCG映像システム

## メディアグローブ、誕生

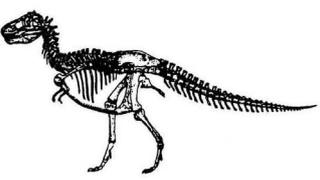
メディアグローブは世界で初めてフルカラー投映を可能にした小型・高精細のデジタルプラネタリウム。さらにドーム全天に高画質なCG映像を投映するマルチ投映機能を持ち、さまざまなシーンで活躍します。

▶各種イベント等にも対応。レンタルもご相談ください。

**コニカミノルタ プラネタリウム株式会社**

東京事業所 〒163-0512 東京都新宿区西新宿1-26-2 新宿野村ビル12階 TEL (03) 3349-5301  
大阪事業所 〒550-0005 大阪府大阪市西区西本町2-3-10 西本町インテス11階 TEL (06) 6110-0570  
東海事業所 〒442-0067 愛知県豊川市金屋西町1-8 TEL (0533) 89-3570  
URL: <http://konicaminolta.jp/planetarium/>

※世界の化石・  
鉱物・恐竜・化石  
人類・動物骨格  
標本及び模型の  
輸入専門業者



ティラノサウルス・REX

株式会社 **ゼネラルサイエンス**  
コーポレーション

〒107-0052 東京都港区赤坂3-11-14 赤坂ベルゴビル802  
TEL 03 (3583) 0731代表 FAX 03 (3584) 6247

INTERIOR / EXTERIOR / DESIGN / EQUIPMENT

## ONY KOBO CO., LTD.

東京都千代田区神田神保町2-7-3 シグマ神保町4階  
TEL (03) 3221-1102(代) FAX (03) 3221-1185



動物園／水族館／博物館  
企画・設計・施工

高品質表現力

文化施設・商業施設・動刻・ディスプレイ・デザイン・制御演出・施工

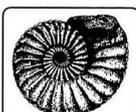
# kokoro

株式会社 **ココ**

〒205-8556 東京都羽村市神明台4丁目9番1号  
TEL: 042-530-3939 FAX: 042-530-4050  
<http://www.kokoro-dreams.co.jp/>

TOKYO SCIENCE CO., LTD.

## ミュージアム・ショップ向／教育用地学標本



地学標本(化石・鉱物・岩石)  
古生物関係模型(レプリカ)

大英博物館／恐竜復元模型

since 1974

●常設ショールーム：紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL.03(3354)0131(代表)

**東京サイエンス**

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル  
TEL.03(3350)6725 FAX.03(3350)6745  
<http://www.tokyo-science.co.jp> E-mail: [info@tokyo-science.co.jp](mailto:info@tokyo-science.co.jp)

調査・企画・デザイン・設計・製作・施工・  
監理・運営およびコンサルティング・プロデュース

より良い「社会交流空間づくり」にむけて…。

## 株式会社 丹青社

〒110-0005 東京都台東区上野5-2-2 TEL 03-3836-7221(代表)  
札幌・仙台・新潟・名古屋・大阪・鳥取・福岡  
URL <http://www.tanseisha.co.jp>

全科協ニュース編集委員会

ミュージアムパーク茨城県自然博物館 資料課長 國府田良樹

川口市立科学館サイエンスワールド 学芸係 久保田耕平

千葉県立中央博物館 教育普及課長 森田利仁

国立科学博物館 広報・サービス部 情報・サービス課長 井上透

国立科学博物館 広報・サービス部 広報課専門職員 原田紀子

全科協事務局  
国立科学博物館 広報・サービス部 情報・サービス課 守井典子  
Tel.03-5814-9863 Fax.03-5814-9898

発行日 平成17年11月1日  
発行 全国科学博物館協議会◎  
〒110-8718 台東区上野公園7-20 国立科学博物館内  
印刷 島崎印刷株式会社